

「はい、はい……あ、大丈夫ですか！ どうもありがとうございます！ ございます！」

炎天下という言葉がこれほどふさわしい日もなからうという猛

暑。珍しく静かな8月上旬の『いよかん』事務所で、須ヶ口博人の

声だけがやけに大きく響く。

「いや、本助かりました。すいませんねえ、いつもいつも」

「なくにいってことよ、こんなの気にするほどのことじゃねえって」

なぜか江戸っ子っぽい口調の印刷所の親父さんと親しげに言葉

を交わす博人の脇では、東山正之、またの名をシナリオライター・

あごドリア——ここにいる誰もが「アゴ」「アゴくん」以外の呼び

方では呼ばないが——と、彼の書き上げたプロットを黙々と読む少女の姿。

石本あおい。

10人中10人がまず間違はなく美少女と答え、10人中10人が「小学生なのに大人びてるよね」とコメントし、10人中10人が手痛い反撃の餌食になる、この少女。こう見えても立派に高校生……もとい学園生であり、同人ゲームサークル界隈ではちよつとは知られたサークル『いよかん』の主宰である。

立てば芍薬、座れば牡丹、

「ほら、あおいちゃんからもちゃんとお礼言って」

「その雑用係、さつきから大きい声でうっさい！ あと『あおいちゃん』ってゆるいな！」

口を開けばワガママ放題なのが玉に瑕の、百合の花だ。

「がつはつは、あいかわらずだな。あんちゃんのところの嬢ちゃんは無理ばかり言ってるのにこんな態度でマジすいません」

博人としては、電話越しでもしつかり聞いていたらしい親父さんについて恐縮してしまう。

「なあに、構うこたねえ。嬢ちゃんくらいの年はな、ちつとワガママなくらいがちようどいいんでえ」

「子供扱いすなっ！」

なんとというか、スピーカーボタンは押ししていないはずなのにどうして電話越しでも、こういうフレーズだけは聴き取るかな、この子は。心の中でため息一つ、忙しい時期に急な仕事を受けてくれたことにもう一度お礼を言っつて博人は携帯の通話をオフにした。

見れば今かけていた電話の間にも着信が入っている。こちら側の作業はほとんど終わっているとはいえ、夏コミ直前のこの時期、涉外担当はそれなりに忙しい。

とはいえ、あくまでそれは「それなり」でしかなかったはずなのだ……。

「ど、どうすか？ オレの脚本ホッどうすか？」

「うくん……、なんてゆーか、エロゲオタの妄想をそのまま書いた、みたいな感じ？」

「そうすか……ガクリ」

「でも、ま、いいんじゃない。突発で出す本ならこれくらいこのポリューム・内容が妥当って気もするし」

「そうすか！ いや、やっぱりね、夏と言ったら海ですから！ 海で水着がポロリですから！」

「とりあえず時間もないし、アゴもアシお願いね」

「オレの筋肉でよければいくらでも使ってください！」

数時間前、夏コミ向けの作業も実質的に終わり、ほとんどのメンバーが夏休みに入った「いよかん」の事務所にやってきたあおいは、さも「いいことを思いついた」とばかりにこう言ったのだ。

「夏コミ合わせで、もう1冊突発本作ろうよ」

あまりにもあまりな思いつきに、いくらなんでも無茶だと説得しても頑として聞き入れないあおい。あげくにアゴがすっかり2時間で突発本向けの脚本を書いてしまったために、博人は方々に連絡することになったのだった。

いつもの印刷所には既にさんさん無茶を言っている上、親父さんの性格からして頼めばまた無理を聞いてくれてしまうのはわかっていたので、他の印刷所に片っ端から当たるも今さらそう簡単になんかにかなるものでもない。

結局最終的にいつもの印刷所に世話をかけてしまったのだが……

……それまでの博人の奮戦ぶりを携帯のディスプレイに映る「充電してください」の文字だけが語っていた。

もっともその表示は博人自身を含めて、誰にも見られることはなかったのだが。というのも――

「はろ、みんなやってるかね？」

「ただいま。……ふう、やっぱりこの時期、外は暑いわねえ」

印刷所との電話の間にかかっていた着信に折り返そうとした、まさにその瞬間、勢いよく扉が開いてやけに元気な声と、遅れておつとりした声が事務所の中に入ってきたからだ。

「あれ？ 今日には本当にこれだけしかないの？ なくんたく」

「もう夏コミの準備も大抵終わったからな」

「そか、残念。みんな揃ってればいいな〜と思ってきたんだけどな。はい、これアイス」

他の面々にも「はいこれ、どーぞ」とアイスを配って回っている

のは、博人の幼なじみである若林梨央わかばやしりお。一見、女性にしては飾り気がなさすぎるくらいさえある服装だが、それが彼女の活力溢れる姿には不思議にマッチしている。

「あおいちゃん、足りない画材買ってきたわよ。……で、印刷の方はどうにかなりそうなの？」

「ん、あのバカが話つけたみたい」

「博人が2時間でやってくれました、的なね」

「もうアゴくんだったらジェバンニじゃないんだから。……ありがとね、

ヒロくん」

一方、そういつてふんわりと微笑むのはサークルの副代表にして、あおいの従姉でもある涼宮千尋^{オオみやちひろ}。折衝を全部押しつけておきながら「バカ」呼ばわりの妹分と違って（それが仕事なので博人としては文句は言えないが）、花がほころぶような笑みは思わず「ひろさんの笑顔、可憐だ…」そう、可憐だと呟いてしまいたくなるほど魅力的だった。

というより気付いたら横で正之がうっとり呟いていた。

「で、だ。どうしてみんな揃ってればいいなと思ったんだよ。アイスが余るからか？」

友人ながら普通にキモいな…と内心つぶやきつつ、梨央の方に話を戻すと、

「え？ あ、もちろんそれもあるけど。ふふふふ…ジャジャーン！」

怪しげな含み笑いと共に何かのチケットが彼女のポケットから飛び出した。

「……？ なんだそれ？」

「ふっふっふ、よく聞いてくれたヒロトくん。これはだねえ、本日開催・商店街のお祭りので使える商品券なのだよっ！ ドッギャー——ン！」

ご丁寧の効果音まで口で鳴らして、ぴらぴらと見せびらかしてくる。言われてみれば、たしかに最近駅から事務所までの道で何やら準備をしていたような……。

「あたしお祭り好きだからさ、今日みんなで行けるかな〜と思ってたんだよね。で、ちょうど駅前でひろさんに会ってお祭りの話して、買い物付き合ったらこれをもらったってわけ。枚数見たらちょうどみんなで1枚ずつくらいあるからいいかなと思っただけだよ…。ま、人数少なくてもその分お得になるからいいんだけどさ」

「なるほどね。あれ、でも待てよ？ 買い物って駅前に画材なんて売ってたっけか？」

「わかってないなあ、ヒロトは。お祭り、屋台に女の子が普段着で行くって法はないでしょ？」

その言葉にピクツと正之が反応する。「…おい、イベントの予感がするぜ」それを華麗にスルーしつつ、

「千尋ちゃん、あれ見せたげて！」

「オッケー、ぱんぱかぱーん！ これを商店街で買って商品券をもらったのでした〜」

これまた口での効果音と共に千尋が袋から出したのは3着の浴衣。

「浴衣キター————ッ！」

「いい反応サンキュ、アゴくん！ さっ、これ着てみんなでお祭り行こう！」

「これ着てって俺たちは？」

「あ、ごめん、ヒロトたちの分も用意すれば良かったね。まあ今から用意するのもアレだし、男の子は別にいつも通りでいいんじゃない？」

「あおいちゃん、ほら、これ凄くあおいちゃんに似合うと思ってお姉ちゃんが選んできたんだよ」

「……暑いから外行きたくない」

「そ、そんなっ！　せつかくお姉ちゃん、あおいちゃんの浴衣姿楽しみにしてたのに……」

「浴衣もかえって暑そうだし」

「そんなことないよ？　お姉ちゃん何度か着たことあるけど涼しかったよ」

「……………そりやお姉ちゃんの服よりはね」

「もう、あおいちゃん反抗的っ！　いいから行くの！　お姉ちゃん、強権発動しちゃうんだから！　梨央ちゃん、ちよっとお手伝いお願い！」

「はいはい……というわけで、男どもは出てく出てく！　はいアゴくん、そこにムービーモードのケータイをこっそり置いていかない！」

かくして、『いよかん』の足早い夏のお祭りが幕を開けようとしていた――

* * *

「あ〜っ〜い〜」

冷房の良く効いた事務所から一步外に出て以来、あおいはこの手の言葉しか発していない。

「暑いっ！　暑すぎるわっ！　もうこの際、商店街とか全部潰して

冷房の効いたショッピングモールにでも代えちゃえばいいのに」

巨大企業体・石本グループのご令嬢であるあおいなら、やってやれないこともないだけに、商店街の皆さんが聞いたら闇討ちされても文句を言えないようなフレーズを連発しながらお祭り会場となっている通りへと歩いていく。明らかに不機嫌の極みだ。

「大体、こんなちやちやな商店街が逆立ちしたところで大したお祭りなんかできるわけじゃない」

罵詈雑言の嵐状態のあおいだが、最初はこんな様子ではなかった。事務所を出る前、浴衣を着せられた時点では無理やり着せられたとはいえ、それほど不機嫌ではなかったのだ。それどころか、事務所で浴衣を披露した後はどっちかというところご機嫌だったくらいなのだ。

「まったく…、あの年頃の女の子ってのは何で機嫌が変わるのかぜんぜんわかんないよなあ」

「自分でウソだってわかっているウソは口にしない方がいいと思うんだけどな、あたしは？」

「……心の声にツツコミ入れるなよ、梨央」

「いや、思いつき声出てたし」

「…独り言だってわかっている独り言にはツツコミ入れない方がいいと思うんだけどな、俺は」

「あははっ、ごめんごめん」

無意識にこぼれていた独り言にまでツツコミを入れてくる幼なじみに対して、つい苦笑が漏れる。あいかわらず自分の言動によく気を配っているものだと思ってしまう。